

「道德教育の未来」セミナー（第4回）

テーマ **令和の時代を生きる子どもと新しい道德教育への期待**

開催日：2026（令和8）年2月23日《富士山の日》（月） 13:00～16:30

開催場所：本学附属小金井小学校オンライン室 & ムービースタジオ

実施結果のご報告



本年度のセミナーは、今回も2月23日の「富士山の日」に合わせて、本学の附属小金井小学校のご理解とICT部の先生方の全面的なご協力のもと、附属小金井小学校のオンライン室を拠点に、ムービースタジオと結んで、講話や協議を配信する形で開催されました。

「特別の教科」である道德科が2015年に位置付けられて、はや10年。今、学習指導要領の改訂につながる中央教育審議会での審議も始められており、たとえば、「考え、議論する道德」の実装、教材の在り方、ICTへの対応、中等教育における道德・倫理教育などが重要な課題となっています。

そこで、今回のセミナーでは、右の流れに示すように、文部科学省で道德教育・倫理教育を担当される堀田竜次先生、大平剛生先生のお二人よりお話を伺い、さらに協議を深めることで、これからを生きる子どもたちの生き方を後押しするために、今、道德教育に求められるのはどんなことか、その可能性や課題について考えることを主題として開催しました。

なお、当日は全国よりオンライン上に、また学内別室に、合わせて205名の方にお集まりいただき、ご参画いただきました。また、多くの先生方のご協力もいただきました。心より感謝申し上げます。

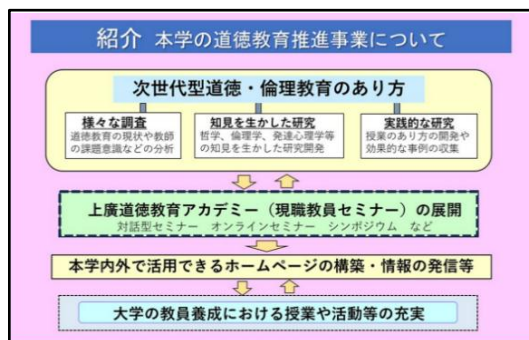


セミナー（第4回）の流れ

13:00	開会挨拶 進行：浅部 航太（東京学芸大学） 本学副学長・機構長：佐々木幸寿 紹介 本学の道德教育推進事業について 推進室室長 永田 繁雄
13:10	講話と展望 ：『道德教育の現在と、今、求められる姿を考える』
13:10 14:00	講話① ：道德教育に今、求められるもの 堀田 竜次 氏（文部科学省）
14:00 14:50	講話② ：中等教育における道德教育の一層の充実に向けて 大平 剛生 氏（文部科学省）
休憩（14:50～15:00） ※前半、後半のバランスから、当初の時間を変更しております。	
15:00 15:30	提言 ：道德教育を未来志向で展望する 永田 繁雄（東京学芸大学）
15:30	シンポジウム ：『道德教育の課題を超えて、これからの期待する』
	提議 ：松尾 直博（東京学芸大学） 全体協議 ：シンポジスト 堀田 竜次 氏（文部科学省） 大平 剛生 氏（文部科学省） 松尾 直博（東京学芸大学） コーディネーター 永田 繁雄（東京学芸大学）
※Zoom発信会場別室との、人数を制限した協議も開催し、 中継にて発信します。オンラインにてご参加ください。	
16:25	閉会挨拶 齋藤 嘉則（東京学芸大学）

セミナーの実際から

本セミナーでは、最初に、浅部航太による司会・進行のもと、まず、推進室の永田繁雄による、開会挨拶及び、本推進室で取り組んできた内容の概要を報告しました。ここでは、年間にわたって進めた各種シンポジウム、夏と冬(今回)のセミナー、ゼミ型オンライン研修などとともに、具体的に進めた各種調査研究や、実践研究にも触れ、関心を広めていただくように努めました。



講話と展望：『道徳教育の現在と、今、求められる姿を考える』

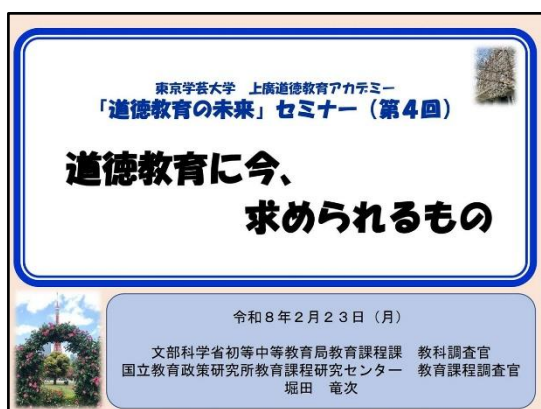
13:10～15:30

その後、前半のプログラムである「講話と展望」は、上記のテーマのもと、堀田竜次氏と大平剛生氏のお二人の講話者より、現在の文部科学省における道徳教育の推進状況に基づく押さえどころや今後の課題について、およそ以下のような内容に触れながら、様々な方向性を示していただきました。



講話①：道徳教育に今、求められるもの

堀田 竜次 氏 (文部科学省初・中局)



【講話いただいた内容から】

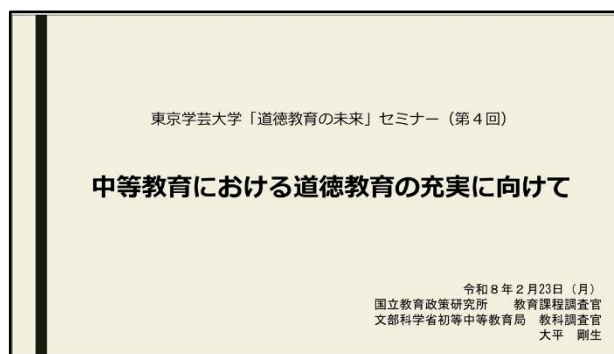
- ・次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方
- ・道徳教育に関する現状・課題と検討事項(中教審WGより)
- ・道徳教育の目標～道徳性～「特別の教科 道徳」の目標
- ・指導の基本方針と道徳科の特質の理解
- ・考え、議論する道徳(～主体的に、多様な考えとの出会い)
- ・明確な指導の意図をもつこと～指導内容と教材の押さえ
- ・道徳科に生かす指導方法の工夫(…特に話し合いの工夫)
- ・成長を受け止めて認め、励ます個人内評価 ほか

講話②：中等教育における道徳教育の充実に向けて

大平 剛生 氏 (文部科学省初・中局)

【講話いただいた内容から】

- ・高等学校道徳教育の目標～小・中・高の繋がり
- ・道徳的諸価値の理解を基に、自分自身に固有の選択基準・判断基準を形成(人生観、世界観ないし価値観)
- ・生徒の心身の発達や特性、課程等の特色を考慮
- ・目標に示す「人間としての在り方生き方」
- ・中核的な指導の場面～「公共」「倫理」と特別活動(例：ホームルーム、生徒会活動、学校行事)
- ・道徳教育の全体計画、道徳教育推進教師の位置付け ほか



※講話いただいた各内容は、推進室の文責にて整理。

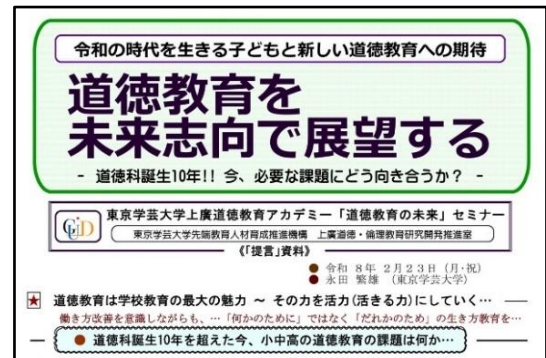
提言：道徳教育を未来志向で展望する

永田 繁雄 (東京学芸大学)

上記に続けて、10分の休憩をはさんで、本学の推進室より永田繁雄が道徳教育に関わる提言を行いました。

【提言に含めた内容の骨子から】

- ・道徳教育は学校教育の最大の魅力～その力を活力に…。
- ・「考え、議論する道徳」の実質化（実装）の方向とは。
- ・道徳科の目標は、価値の「教え込み」ではない。
- ・子どもの主体的な「生き方」を促す主体的な「伴走者」。
- ・「問い」は教師の発問からか？子どもの問題意識からか？
- ・「多面的・多角的」思考で、子どもの心をしなやかに…。
- ・「落としどころ」を「落とし穴」にしない授業を…。



シンポジウム：『今、必要な道徳教育の在り方とは…』

15:30～16:25

提議:	松尾 直博 (東京学芸大学)
全体協議:	シンポジスト 堀田 竜次 氏 (文部科学省) 大平 剛生 氏 (文部科学省) 松尾 直博 (東京学芸大学)
コーディネーター:	永田 繁雄 (東京学芸大学)

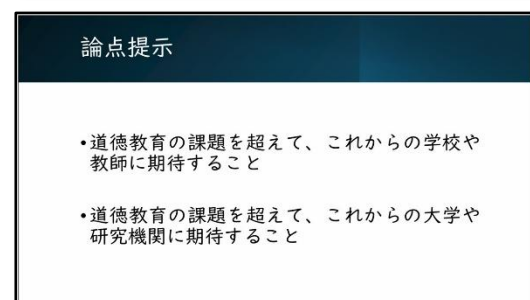
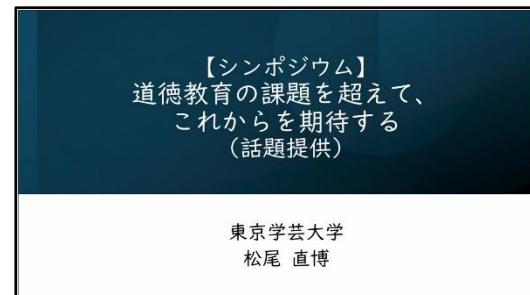
続いて、上記のタイトルのもと、ムービースタジオに集まったフロア参加者とオンライン室とを繋いで、ミニシンポジウムを開き、それを中継しました。

《松尾直博による話題提供と論点提示》

まず、本学の松尾直博が、話題提供を基に論点を示し、話し合いのきっかけを含む方向付けをしました。

【提示した主な話題と論点（右下のスライド）】

- ・現在～近未来の学校と教育…「知識データベース・エキスパートシステム」にアクセスし対話しながら学ぶ
- ・「ポスト現象学」の視点～新たな主体と教授・学習・倫理
- ・生成AIで課題がうまくできることが自動的な学習につながるわけではないこと
- ・先生の副操縦士：先生を有効に生かす方法 ほか
⇒〈論点提示〉☆道徳教育の課題を超えて
…これからの学校や教師に期待すること
…これからの大学や研究機関に期待すること



《協議の中で話題になった主なことから》

シンポジウムは、上記を重要なきっかけとして協議が進められ、深めていくことができました。特に、上記の松尾直博が話題提供し論点を示した内容については、このような考えが出されました。

◇いま、ICTについて、効果的な活用の仕方を皆で考えていくことが必要。授業の環境が大きく変わってきているが、個が生きる効果的な使い方を意識して、指導の幅を広げていくことを特に大切にしたい。

◇デジタルテクノロジーが一層広がる
近未来の社会状況は、特に高校段階
でその課題を意識していかななくては
ならない。高校では道徳授業を行わ
ないので、指導の場面を多様に発想
することが重要になる。



◇中学校でも指導の課題が様々に見ら
れるが、それを超えた高等学校において、生徒の成長実感や意欲の向上につなげていく指導が、
これからはより大切になると考えている。

さらに、ムービースタジオのフロアから出される質問や意見をもとに協議が深められた。その中
では、次のような考えが出されて、オンライン室との往還などで共有されました。

◇少し残念なことに、道徳授業に教師自身が魅力を感じていない実態がある。また、教師が苦手意
識を拭えていず、そこから抜け出せないままにいることも多い。教師自らが授業のよさや楽し
さを感じなければ、よい指導につながらない。そのあたりを特に心に留めていきたい。

◇小・中学校段階での道徳授業での様々な体験が、高等学校までつながっていく。その意味で、よ
り多様な道徳の実際の体験や、価値にかかわる様々な話合いなどの学習体験を積み上げていく
ことが特に大切だと感じている。

◇「考え、議論する道徳」の実装が、今、強く言われているが、学校で使う教科書の構成やその教
材の在り方に、一層の工夫を入れていくとよいのではないかと。それが、実装とも言える様々な仕
掛けや仕組みに成っていくのだと思われる。

◇高等学校段階では、「総合的な探究の時間」があるが、道徳教育との関わりは今まで以上に考え
ていくべきではないかと思う。例えば、シチズンシップ教育などは、その両方にまたがる重要な
教育だと思われる。



このように、授業作りの指導技術の側
面や、子どもの発達の側面、教育課程と
しての位置付け、教科書や教材における
柔軟な発想など、様々な考えが出されて、
相互に深め合うことができました。

《まとめと閉会の挨拶》

最後に、推進室の齋藤嘉則により、今までの協議の内容について、特
に学習指導要領改訂に向かう現状の視点から、また、小学校から高等学
校段階までの長い視点で児童生徒を育てていくことの重要さの視点から
まとめの話をし、それを閉会挨拶として、今後につなげる展望をもち、
本セミナーを閉じることができました。



実施中や実施後に寄せられた感想・コメント等から

終了後に、チャットやメール等にて、様々なご意見やご感想をいただきました。ここでは、その中からいくつかを要約し、整理をして、以下に掲載させていただきます。

【授業を楽しみ深める大切さ】

- 小学校の現場では、「すぐにわからない」「答えが一つではない」という授業を行うことに抵抗を感じる先生方が多い。堀田先生が仰っていたように、やはり、授業を楽しむ教師でありたい。
- 道徳教育が浸透してきた中で、さらにそれをレベルアップさせるためには何が必要か考えた。

【小・中・高・特別支援の関連】

- 義務教育段階の内容はもちろんだが、大平先生の話など、高等学校の先生方にも、研修をしている身として、学びの多いものだった。
- 小学校から高校までのつながりについて、自身の勉強不足を痛感した。総則を含めて学習指導要領解説を今一度丁寧に読み直そうと思う。
- 特別支援学校での重度知的障害のある児童生徒の場合、価値観を伝え、価値観の押し付けになってしまっていないかというジレンマが現場にはある。

【新たな課題や期待】

- 「納得解」は個人か、集団のものかが新たな課題となった。
- 道徳、特別活動、総合的な学習の時間のつながりや、それを生かす実践等をさらに知りたい。
- 堀田先生の「子どもだけでなく、教師も地域も、全てが主体的に」という言葉が心に残っている。

【道徳への自己の研鑽】

- まだまだ頭の硬さを思い知らされる。これからも、ずっとアップデートし続ける教師でいたい。
- 私自身は中学校教員。大平先生のお話にあったように「教師自身の専門性をいかした道徳教育」を行っていきたいと考えた。
- 多様な子どもの「深い学び」を確かなものにするために、私自身が研鑽を積む必要性を感じた。
- 授業の板書や問い返しなどを準備すればするほど、型にはまった予定調和的な授業になりがち。子どもたちと一緒に考えるくらいの構えをもちたい。

今回も、多様な視点からのご意見やご感想をありがとうございました。実施する私たちにとりましても、よりよい研修への改善の視点にもなります。これらの貴重な内容を、今後の道徳教育に関する活動などに生かしてまいります。



東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構
上廣道徳・倫理教育研究開発推進室